

歌の周辺

昭和35年3月下旬、私は母に連れられて、一日がかりで松山市の近辺にある四国八十八か所の札所のうち八か所を巡礼した。先ず四十六番・浄瑠璃寺から出発し、ほとんど徒歩で八坂寺、西林寺、浄土寺、繁多寺、石手寺、太山寺、円明寺を巡った。じつは私は幼いころ病弱だったので、母が心配して「お大師様」(弘法大師のこと)に願をかけ、私が健康になったので、そのお礼参りをしたのである。

この歌は、後年いろいろな四国巡礼の映像をもとに想像して詠んだ一連の中にあるが、歌の底には母と歩いた八か所の光景が潜んでいる。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・37

菜の花に海光とどく眩ゆさを遍路歩め
り陽^ひの国四国

— 『雨月』

【鑑賞】一面の菜の花、きらめく海光、白装束の遍路と相まって鮮やかな映像が広がる。ア音の連なりが明るく晴れやかな印象の歌だが、次に置く歌に愕然とする。「日なぐもり菜の花冷えて笠深く遍路歩めり死の国四国」この時期作者は病床の母を見舞い関東から郷里の愛媛へ度々足を運んでおり、遍路の姿と小題の「陽の国・死の国」に四国を生国とした作者の深遠な思いが重なる。(浅野千里)



ふるさとコレクション——208

もんじゃ（東京都）

東京の下町には、駄菓子子を並べて売る「駄菓子屋」がたくさんあった。店の片隅には鉄板があり、そこで子どもたちが「もんじゃ」を焼けるようになっていた。たいてい50円くらいで、具も簡素だったが、友だちと鉄板を囲むのは楽しいものだ。

そもそも「もんじゃ」とは、鉄板に小麦粉を溶かした生地で文字を書く「文字焼き（もんじゃき）」が縮まった言葉だとか。下町の子供たちはそうやって文字を学んだのである。だから「もんじゃ」は「もんじゃ焼き」ではなく、あくまでも「もんじゃ」と呼びたい。

最近では、駄菓子屋自体が少なくなってしまった。

かわりにお好み焼きの店に「もんじゃ焼き」がある。たっぷりの野菜と肉や海鮮。具で土手を作って焼いて、もちもちとした食感を楽しむ。駄菓子屋のもんじゃは進化して、大人も楽しむ料理になった。

「文字焼き」が進化した「もんじゃ焼き」。もう文字を書くことはないけれど、具で丸い土手を作ったり、ひとつの鉄板からみんなでひとつのものを食べる楽しさは変わらない。

「東京下町無形重要文化財」くらいには、なってもおかしくはないのではないだろうか。

（写真・解説：鮎川 文子）